

何気なく住んできた四絡の昔を知る、郷土に愛着心を深め、ふるさとの歴史を次世代につなぐ「四絡の昔を知ろう」

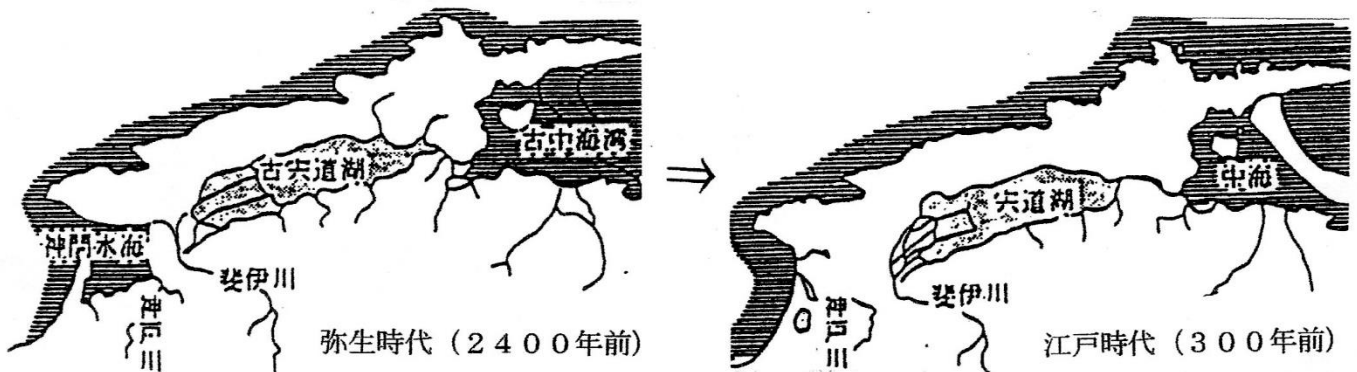
矢野町 吾郷弘司さんに地質学の観点から四絡の歴史を紹介していただきます。

『四絡の昔を知ろう』(その2)

②出雲平野の形成(誕生)

○出雲平野は「島根半島」と「中国山地」の間の東西20km、南北5kmの間の平地を指し、四絡地区はそのほぼ真ん中に位置していることになる。

- ・旧石器時代(1～2万年前)には最後の氷河期があり、海面は現在より最大80mも低く、隠岐の島とも陸続きであったと考えられている。
- ・縄文時代中期(およそ5000年前)には地球が温暖化して氷が解け、海面は現在より4mも上にあり、「島根半島」と「中国山地」の間は日本海の一部(入江の状態で古宍道湖と言われる)となっていた。当時は斐伊川(出雲大川と言った)も神戸川も入江(古宍道湖)に流れ込んでおり、特に斐伊川によって膨大な量の砂が運ばれた。そのため、入江は年々縮小されていたと考えられる。



- ・現在、大社町から多伎町にかけての海岸線はこの時期の砂によって形成されたものであり、斐伊川からの砂の補給が絶たれた現在は急速に砂浜が侵食され、細ってきている。
(※神戸川からの砂の流入は洪水時以外はあまりなかったと考えられる。)
- ・縄文時代後期(2700年前)に三瓶山が大噴火し、多量の火山噴出物(火山灰や火山砂)が神戸川によって運ばれ、古宍道湖を分断したために今の出雲平野の原型ができたと考えられている。
(※斐伊川が運ぶ砂は花崗岩が風化したものであり、砂は現在は宍道湖に流れ込み、宍道湖の水深を年々浅くしていると考えられる。一方の神戸川が運んだ土砂は三瓶山の大噴火によるもので、安山岩質のものである。)
- ・その後、弥生時代末期(1200前)には斐伊川から流れ込む大量の砂によって外海と遮断され、大きな湖沼となった。湖沼の北側部分は湿地となり、菱や萱が繁茂していたが、現在は先人(三木與兵衛翁ら)の努力により干拓が進み、肥沃な水田となっている。
- ・江戸時代(300年前)には斐伊川は完全に東方向に流れを変え、宍道湖に流れ込んでいる。
- ・斐伊川の流域には「自然堤防」と呼ばれるやや高い土砂のたまった場所ができた。(四絡地区では小山、矢野、姫原など「～山」「～野」「～原」の付く場所がそれに該当する。)

※次回は私たちが生活している出雲平野の形成について紹介します。

(文責 吾郷弘司)